

補

遺

遺

補

補一 宗鏡寺再興供養沢庵宗彭香語并天祐紹果識語

元和二年八月二十九日 宗鏡寺藏

に示寂している。

補二 沢庵宗彭賦偈

宗鏡寺藏

有時哉、元和二曆夏之孟、資始削地剝草、引五須弥為

柱、揭一鉄匂為梁、月斧雲斤、一宇功成、則及秋仲賴

今日廿又九、當元公韓諱日照公肖像於祠堂、点祖座於中

位、安置開山大道和尚嚴像之、次燒這妙香、以供養三

世十方佛陀聖衆、依此薰力、大禪定門頓証妙果、導三

界幽溟、同登覺路、偉哉、功德這個且置開山師祖安坐

之一句如此、送着、

補三 沢庵宗彭壽像贊

宗鏡寺藏

法燈已暗過年々

宗鏡再輝河半千

点

〔追筆〕  
〔但山〕宗鏡禪寺再興供養之香語也、

沢菴和尚之筆作、寺僧就予求加毫、

加以順其情、天祐叟紹果（印）

○天祐紹果は大徳寺一七〇世、寛文六年九月廿一日

○沢菴の頂相を画いた僧の印文は「曉夢」。

丁

玉隱座元七周忌燒香次賦小偈云、

七星移北水流東、忌景回頭一夢中、

十月梅花是香炷、諷經声喫嶺松風、

寛永十二年乙亥十月小春十三日莫

沢庵叟書焉（印）

補四 但州宗鏡寺規繩（袋綴冊子）

宗鏡寺藏

但州宗鏡寺規繩

万ノ筋道ヲ能ク不明知、則心ナラス誤リテ、為自他ノ惡シ、就万事、可有子細様子可窮知也、

一常住与諸塔頭之挨拶之事、於當寺ニナラハ願成寺・

正受・極樂・勝福寺等之諸塔頭ハ其塔頭々々ノ其先

師云々相統(シテ以下同)ノ自ニ坊主得讓リテ看坊スル人ハタトイ

客僧タリト云(モ以下同)尼坊主次第也、客僧ノ分ニテ寺役難成

ナレハ小僧一人成リ共取立テ朔日・十五日・開山

忌・相那忌(以下同)雲龍院殿御月忌等之時出仕サセラレ候御

事、是寺役也、京都之諸本寺・諸五山・大德・妙心皆

々此例多シ、諸塔頭ノ院主看坊之事ハ自方丈指図ナ

ト仕事、一円無之法也、其塔頭ノ坊主ヨリ得讓ヲ看

坊ヲスル事ハ不及是非、若可致看坊者ノ無之時ハ其

派ノ人、又ハ其縁近ノ人才覚ヲ以テ看坊ノ事可計也、

自方丈計レ之事、一切不可有也、是天下ノ通法也、非

私ニ本寺々々如此ナリ、万一破戒無漸(儀)以下同ノ義カラハ其一僧ノ曲事也、任法度可罰之、於塔頭之義、是又常住方丈不可計後住ノ看坊等ノ義ハ可知右書付ナリ、

一縦ハ於當寺ナラハ正受院ト願成寺不間惡ノ義絶スル

トテ其兄弟子ヲ恐テ我持ツ正受院ヲアケテ他国スル

(コト以下同)「ユメ」可有義ニアラス、縦ハ俗人ノ兄ト間惡ト

云テ、主ノ家ヲヒラキ我家ヲステ、他国スル「ハナ

キ也、殊ニ出家ハ主ト云者ハナシ、開山ヲ主トノ居

者也、然ルニ弟子兄ト間惡トテ他国スヘキヤ、私ノ

入魂ナキハ私事也、公界ノ義ハ毛頭カマイナキ事也、

縱住持ノ氣不合寺僧ナリトモ寺役ヲツメ出家ノ無

行義濫行ナケレハ住持ト問惡トテ久住者、我力院ヲ

離レテ他国スル「努々不可有義也、

一住持ハ一代々々ノ者也、寺僧ハ人コソ生通ニナラヌ

トイヘモ、カユレハ一代ニテ又別人住持アル也、住

持ハ如此カハレモ、諸塔頭ハ其先師々々ヨリノ讓ヲ

得テ、相統ゾ所ノ事ノ久キ事ヲモ致存知、住持無案

内ニテ、作法ノ惡ヲモ為久住者異見ヲモ申シ、住持モ又久住者ト万事談合アツテ聊ノ事ヲモ相続アル者也、所ノ法様ヲハ久住者ナラデハ知ヌ者也、

一正受院ハ愚老俗家ノ伯父存公首座禪師之跡也、然処

ニ玉隱座元退願成寺之時分、正受ヲ愚老玉隱ニ所ニ

預置一也、玉隱死後ニ付三首座、三首座無故他国ス、

其身愚痴ニシテ道理ヲ不知、其身ノ分別力、又依人異見歟、他国ノ相伝ノ一院ヲアキヤトナス、甚曲事不運ノ子細也、如右正受院ハ愚老由緒之地也、三首

座立帰テハ可為如前々、若シ万一無可帰意、則為愚老計、可置別人也、

一本寺末寺之事、末寺末派ヨリ本寺ヲハ知者ノ也、本寺チャトテ末寺末派之寺ヲ進退自由ニスル事ハ無之法也、縱ハ俗家二親ノ跡ヲハ子ガ知也、其ノ子ノ跡ヲハ、又次ノ其ノ子ガ知也、祖父ノ方カラ孫子ノ末ノ跡ヲ知ト云「ハ無キ也、是ト同シ、縱ハ宗鏡寺ノ末寺アルヘシ、其末寺ハ又其末寺ノ末々ノ筋門派ア

リテ知之ナリ、湯嶋ノ極樂寺ハ宗鏡寺開山ノ弟子金山ノ寺也、然レハ極樂寺カラ宗鏡寺ノ事ヲハ知也、宗鏡寺カラ極樂寺ノ事ヲハ不可知法也、極樂寺ハ又極樂寺ノ末々ヲ承次門派アリテ知之也、宗鏡寺ノ談合評定ニハ自極樂寺モ出テ聞也、ヨブ法也、縱ハ自田舎上リ妙心寺ノ住持ヲスル人達ハ、妙心寺開山門下末々ノ人達也、是レ下カラ本寺ヲ知ル証拠也、又本寺カラ末寺ヲ知事不成証拠也、天下ノ禪林、皆此法度也、

一當寺之内、極樂寺ハ珍庭・大室・清首座相次テ看坊スル上ヘ者、其ノ身出家氣アリテ志ヲトゲハ甫藏主幸ノ事也、万一身ノ志ナクハ別人ヲ可計置也、勝福寺ノ御影、愚老受業ノ坊主希先西堂和尚ト弟子兄弟也、然レハ勝福ト極樂ト一派也、又極樂寺之大室と半兵衛ト親類間ナレハ、跡ノ如此成リ行コラナゲキ、日比湯嶋ノ極樂寺ノ坊主ヲ呼ヒ上セテ掛持ニ被置也、此ノ比清首座弟子ノ甫藏主我々異見ニテ極樂寺エ令

還住、然ハ珍庭和尚・大室座元・清首座・甫藏主次第相続シ来ル也、正受院ノ先師存公首座ハ、是モ珍庭和尚ノ弟子ニテ、大室・勝福寺ノ西堂皆弟子兄弟ナレハ、正受院ノ坊ハ勝福寺・極樂寺一派也、三首

座ハ願成寺隠居玉隱座元ノ弟子ナレハ、其身ハ願成寺派也、然レハ引廻ノ願成寺モ正受院・極樂・勝福皆一派同前之事ナレハ、各々入魂候テ、能ク守護方丈可被持堅寺家也、願成寺ハ乾峯登公今ノ願成寺屋敷ニ草庵ヲ結ヒ居住ノ其後紀州工罷越シ、玉隱ニ跡ヲ譲被申候、玉隱長首座ニ又譲被申候、首座弟子二人アリ、何レニ可譲ニ難申出、死後ニ可然様ニ寺ヲモ持可申者ニ願成寺之看坊、為各被仰付被下由申候而相果了、長首座正指シハ珍藏主ニ有之由、各々被見及候故、珍藏主願成寺相続被申候、今一人之弟子貞藏主ハ此度愚老勝福寺ヲ付属シ申覺悟能ク出家ノ行義無相違、勝福寺ハ貞藏主次第也、貞藏主已後ハ存寄ル弟子譲リ可被申也、此度珍藏主ニ加異見、乾

峯登公・玉隱・長首座絵像迄為書、愚老加讚語ヲ、是又塔頭々々ハ依先師之讓相続シ來事ヲ人ニ為令知也、返々寺僧ヲ無故追放スル「不可有之、為其、遺此言者也、

一當寺惣門之事、其以前ハ塔頭々々之門内ニ家來者居ナリ、其後相改テ於門前各々ニ四塔頭ト方丈割渡シ方丈ト四塔頭ト各々ニ有其分ニチ際タ諸塔頭之門前屋敷ハ自塔頭々々可下知也、自方丈不可計、塔頭々々之看坊計イ次第也、大雪大風等之時ハ無塔頭方丈之差別、各ノ門前惣門皆出コト可見舞、是門前役也、非常有之義偶之義也、於相背者、其塔頭可有理也、  
一山林妄リニ不可截、凡木ハ不經十年廿年、則柱ラホトニモ不成、截之則廿年ノ功ヲ一時ニホロボス、可借之々々、凡為住持人、可自思、我レ此處ヘ來リテヨリ扇長ホトノ木也アラサン、松杉或竹離木ニテモ何十本植タルソ、若シ一本モ不植ハ恥キ義也ト可被顧身也、況又我ヨリ先々有シ木ヲ截アラサンハ云ニカイナキ

「也、不植而只截ハカリナラハ山終ニ可荒、為寺之用不截而不叶義ハ不及了簡也、然共以錢一百買ハ可得、惜其錢而截山無道心ノ人也、錢ハ勸進スル毎百家ヲス、メハ百丈<sup>(文)</sup>ノ錢ハ一時ニ可出、一文錢ヲ寺ヘ惜ム人ハ不可有之、然ハ出錢俗人ハ有道心、截ル出家ハ無道心也、錢時ノ間ニ可到来、十年廿年ヲ経タル木ハ一時ニ不可生、可惜哉、臨濟栽松ト云事アラスヤ、

一寺亡歟トナル事、寺アレ看坊モナク、アキ寺ト成リツブレハテテ草原ト成ニ、其跡アレバ百年後モ粗那ノ縁ニ依テ再興アルヘシ、草原ナラハ草原ニシ置者也、其寺ノ派ノ末々ノ人ナラスノ無故田畠ニナスヘカラス、是ヲ横領ト云、地頭給人トテ無是非横領セハ不及是非、為私不可致自由、不ノ知法様為非之義、不及是非、知犯之曲事也、一旦ノ身ノ為ヲ思テ不知愧也、

一門前之吉兵衛ト云者ノ自昔當寺門前相侍リタル者之

子孫只一人也、此者之伯父宗鏡寺町ニ雖有之、為公義御<sup>(義)</sup>百姓田地多ク作り今ハ町人也、吉兵衛一人ナル故ニ自親与右衛門時、為門前之年寄与屋敷不相贊<sup>(替)</sup>、外於寺ノ義者、申此者渡シ置所ナリ、此者存知イタサハ惡義有ヘカラス、因人ニ不和ノ人ハ此者ヲモ是非ヲ云事アルヘシ、一人ノ私ハ証ニ成ヘカラス、諸人ノ言トコロ見ル処、鏡ナルヘシ、諸人ノ心ニ当寺大工本ノ事、先年以太守之御意相定ム、矢野竹庵被申上歟、以太守御返報、授彼者置也、至子孫可伝之於扶持者、只米一俵遣之、扶持ト云程ノ義ニアラス、年首・歳暮之祝儀<sup>(義)</sup>ヲ遣ハス分也、江戸・遠國ノ義ニアラス、年首・歳暮ノ祝儀ヲ遣ハス分也、江戸・遠國之役ヲ被為赦免、以是為自寺扶持者也、

一予庵室ノ回<sup>ノク</sup>、扇長計之松杉等手自栽之、今凌雲ヲ毒油ノ木有三本、取実成油事一切無之、毒露触ハ<sup>ノ</sup>身ニ自他共心持惡シ、五月五日之<sup>ノ</sup>朧艾菖蒲一朝之事ナ

レ庄惡氣ヲ避、藥露ヲ承思之故、當年截之也、非材

木之用截之、庵前ノ山松一本藤纏桔、為退治藤、此

度藤松共截之、松ハ已ニ枯木之不成山ノ色ト、雖寸

木喜テ可栽之、嘆息メ而莫截之矣也、世話ニ寺林ト

コソ云ニ、セメテ栽スモ旧ヨリ有リシ木ヲキル「ナ

カレ、

一山ノ木ハ切テカクス庄切カラカクレナン、櫻木ノ僧

ブ

正ト云ガイヤトテ切りタレバ、キリ木ノ僧正ト云、

キリ木ノ僧正ト云カイヤトテ堀テス姓タレハ、又ホ

リ木ノ僧正ト云シ事アリ、何ニ付テモ名ハカクレナ  
キ物也、同クハ能名ヲ残スヘシ、一旦身ノ為トテ名  
ヲクタサンハ口惜カラスヤ、

寛永二十一年十月吉日 沢庵宗彭（花押）

○沢庵自筆、墨付五枚。

補 \* 沢庵宗彭書狀

正保二年正月廿五日・三月十六日

宗鏡寺藏

改曆之御慶、實以不可有際限候、兩上様御機嫌能、

上下万民喜申儀ニ候、

一極月十七日之愚札、同晦日ニ御披見之旨、悅入候、

極月廿五日御國ヘ被為入候由、今程可為御休息存候、

一來二月廿九日雲龍院殿御作善之儀、愚心存寄候通、

左も可有之様ニ被思召候由、是又滿足仕候、後藤与

右衛門迄具申遣候趣、被聞召之由候、吉祥寺切々御

煩之由、無心元存候、宗鏡寺ヘ御出頭之儀、其時分

者、定而暖氣ニ罷成候間、可為御快氣候、於御出頭  
者、御満足可被思召候、三十三年を御國ニ御座候而  
御位牌所之寺にて被仰付、御家中諸侍御仏事ニ逢、  
御燒香可被致事も皆々之可為本意と存候、紫野にて  
の儀ハ私在寺仕候ハ、の儀ニ候、私居不申候ヘハ紫

野にて被成候者、無專様ニ御座候、又天祐など被請

下、燒香御頗有度儀と被寄思召候段も御尤ニハ存候  
ヘ共、為住持昂以下同

存候、三十三年之以後ハ又五十年忌可被成候、且出  
度祝入申候、石河土佐守殿親父去年五十年忌被執行

候、目出度儀候、就其、我等も詩歌なと仕候、  
 一御同名対馬守殿御下着被成候へ共、愚老極月廿六、  
 七日より相煩申、于今、年頭之登城も不仕候故、不懸  
 御目候、愚老儀、極月廿五日ニ堀田加賀守殿下屋敷  
 へ就御成、殊口切にて候、為上意、御相伴ニ可罷  
 出之由候故、少々氣相惡敷候へ共、おして罷出候、  
 自廿六日、散々相煩、養安院ノ藥二、三日、其已後  
 玄勝法眼藥至今日被下候、度々之上使諸医皆々御  
 見廻共忝次第候、然共玄勝藥相應申候間、被下候、  
 私一代未覺大病にて此度者旅行必定と存候處、得快  
 氣申候、於此分者、日々得驗氣可致本復候、御下着  
 之節、可得御意、満足仕候、

一極月廿九日・当月三日兩度宗鏡寺へ被成御参詣、お  
 くの庵室御覽候様子御書中成被下候、私も下着之時  
 分古ニ見かハし申山も大ニ罷成様ニ存候、切とおし  
 のあたりの松などハ大木の松山ニなり申、驚目斗ニ  
 御座候つる、余命無御座候間、二度見申事ハ御座有

間敷候、座中へも此世にてハ入申事御座有間敷候、  
 庵室ハ又すてられぬ儀候間、折々宗鏡寺御参詣之時  
 分者、被掛御腰可然存、棚なども取はらひ置申候、  
 私今少逗留仕候ハ、茆堂之中、北南ニ腰懸を仕、仏  
 之御座候つるうしろの壁を取申、そこより勝手へ御  
 供之衆も被參候様仕度存候へ共、早無余日罷成候故、  
 不及是非、残多罷帰候、庵室を罷登候時分者、いつ  
 とても畳をあけ湿氣之用心なと仕、方々之入口等、  
 能釘をさし、出入の口ニ鎖をおろし候て罷立候へ共、  
 此度者万事取乱候故、其砌之當座之初末、秋庭平左  
 衛門尉ニ頼置申候、是ハ當座之儀候、始終を平左衛  
 門ニ頼申にてハ無御座候、然處ニ當座之取置むざと  
 仕候様ニ御座候へ如何と平左衛門存候故、御下着  
 被成、庵室御覽候迄ハ平左衛門かぎを頼申候て、今  
 度御下國極月廿九日御参詣之時、畳をも敷、掃除如  
 形仕、懸御目申由申越候、自是已後ハ宗鏡寺之中  
 境地、庵室之事候間、不及申儀候へ共、平左衛門ハ

努々存間敷候、山水竹木万般鼎山之可為御計候、私罷候て已後ハ、もはや彼庵室私のにてハ無御座候、つく人もなき鐘にて御座候間、為結縁、勝福寺ニづらせ申候、釈迦之三尊も勝福寺之本尊と仕候、帶刀殿御位牌所之事候間、利益ハ一躰ニ候歟、

一旧冬改元、正保如御書中目出度儀候、近年天下餓死病死様々惡事ハかり御座候間、万事あらたまり目出度候、冬春江戸中咳氣はやり申、殊外難儀仕候、我らも其中ニ候、京都之事承候も同前御座候、

一歳旦之詩歌などの事承候、當年者病氣付何の思入も無御座、くちおしく存候、日外も御状被下候様ニ存候、御返事ハ定而申間敷候、いつくの比便宜御座可有由承候へ共、其時分なにそ取紛候へ乍存打過、背本意存候、私煩之儀、連々能御座候、食も能被下候、乍恐御氣遣被成間敷候、半兵にも此旨被仰聞可被下候、慮外々々、

一宗鏡寺の儀共、一巻書申候て其地罷上候時分、鼎山

ノ前にも宗玖ニよませ申候、於京都懸御目候時分、御前へも懸御目可申存、懷中仕候へ共、透無御座候て無其儀候、此度懸御目申候、宗鏡寺中之儀、宗鏡寺中之儀、如此御座候ハ、形はかりもつゝき可申哉、出家法度之儀ハ先年愚老書申候て懸御目申候、其法度書方丈ニ懸申候間、折々ハ宗鏡寺御參詣之時、御覽被成候ハ、寺中之出家衆心もけにハちかひ可申、大御建立と存候、恐々謹言、

正月廿五日

東海寺  
宗彭（花押）

小出大和守殿  
吉英

人々御中

追而申入候、宗鏡寺へすへ申候三尊ノ釈迦ハ月庵ノ弟子渡唐之時、自大唐子細候て舟ニのせて帰朝候、しの谷の大安寺といふ寺の本尊にて御座候、私取よせ申、久敷庵室ニすゑ申候、此比者にかわもはなれ、御くしハ土間ニころびまへり候て御座候へ共、たれやの人取あくるともなく御座候、何とぞ細工ニ成共

遺

補

にかわをも付被置候ハ、可然之由、半兵衛申候へ共、

鼎山もせうやうもなきよし被仰候、愚老其地へ下前

ニ加様の躰を沢庵見申候ハ、如何可被存とて。半兵衛  
細工

人ニ申付、にかわ付共仕、もとの座ニすゑ置申由申

候間、今迄さへ其通ニ候へハ此後ハ猶以手のつけて

も無御座、終ニハたき物と成可申と存、湿氣も下ノ

寺ハかるく御座候間、旁以勝福寺へ遣候、先年御同

名対馬守殿其地ニ御在城之時分、取寄申にかわ付な  
と仕置申故、今迄も此仏残り申候、今時分の出家の  
無道心何とも難斗候、外相はかり出家にて、内心ハ  
俗方の心指よりもあさましく候、連々可被思召合候、

御恥敷儀候、

(ウツ書)正保式年酉二月十四日 出石へ来三通之内

三月十六日ニ御再報申上候、

貴報

補六 沢庵宗彭拝播偈

十月八日

宗鏡寺藏

春風桃李花開日  
秋露梧桐葉落時

拝播

珍藻如閣計、山岡千里心、不企蛙歩四、足謝疎闊罪、

十二月  
小春八日

宗彭（花押）

〔ウツ書〕  
金地笏室

侍衣閣下」

補七 沢庵宗彭書狀（軸装）仲春十四日

宗鏡寺藏

尚々、我等事、近々江戸罷越候、其用意故、不得諒、  
無沙汰、背本意存候、如仰懸御目候而、万々可申入候、  
一書申入候、如来寺之前御普請、無所残結構被仰付、  
早速出来、過分至極存候、為御礼、先一書如此候、何  
様近日懸御目候而、可申入候、恐々謹言、

(二月)  
仲春十四日 宗彭（花押）

補八 沢庵宗彭墨跡并夢伴子識語

宗鏡寺藏

(追筆) (沢庵宗彭) 春雨老禅之真毫也、依佗求加疎筆、返之、

夢伴子(印)

雪の贊のある沢庵宗彭像(氷雪筆)など数点がある。

○春雨老禅は、沢庵の出羽上山の配所を春雨庵と称

したこと因む。

補九 沢庵宗彭像贊

慶安四年六月五日

宗鏡寺蔵

衣相莊嚴春譲花

芭蕉有葉又無了

只羈仏祖住中罪

七十殘僧負鉄枷

先師曾自令画此像并製贊語、

偶欲染毫、不果已須世了、今自

遺藁中拾将来此縹糊、嗟吁、

叙去久徒刻船矣、

慶安四辛卯年六月五日

受業小比丘宗晃拝書(印)(印)

○宗鏡寺にはこのほか享保七年孟春十一日の天柱義

補一〇 \* 沢庵宗彭入寺開堂法語

宗鏡寺蔵

(題額) (追筆)  
「入寺開堂法語」

中興沢庵禪師真蹟

山

振威一喝、臨濟入門便喝、(朱筆)以下同じ喝一喝、太遲生還我一喝、

○雲侶拱北、天門向南透得看、驛步頗視左右云、山花似錦、澗水如藍喝

一喝、

仏

○五千葉典對一說、東坡面前莫論文章、溪声便是廣長舌、

又

○開一張口、說無說有舉着面前云、会麼一舉四十九、

當日唱之、

一先進紅枳迦、後進綠弥勒(印)、  
拝大德如來麼現紫金色、

當日唱之土地  
一嘗持把茅授仏鑒底非汝輩麼、仏鑑殊小壳弄、休々至人無夢◎

又

○護法護人無事生事、聽宝山唱菩薩蛮麼、囉々哩々◎

祖師

○滿堂死老漢四七三◎、阿呵々、眼似漆桺口如幅担◎

又

一少林山下九年浣盆、黃嬖山頭三頓撲殺◎、規行矩步不可攀百丈路滑◎

一拍手云、業識睡未覺那◎

大小列祖何似茄子瓠子

冬瓜◎

室

一朝步三千、雞催晨興敢不臥、  
暮打八百、燕無居舍絳招忙、

〔執竹力〕  
權升範  
云、江南野水碧於天、中有白鷺閑似我、

○胡打亂打、無塵生塵◎  
〔執力〕  
云、寶山底漸耳、無事是貴人◎

又

○渾岡打就、生鐵鑄成◎、有帰處广、水到瀟湘一樣清、

○朝打四夷、暮打八蛮◎、何故如此、大塙不躰閑◎

勅黃

一玉案勅文字、世眼不可讀、不見道天子穆々◎

山門疏

一松老雲閑山門封疆◎、茂林修升好个文章、重說偈言、

藏瓊枝寸々是宝、折梅檀片々皆香、

同門疏

○聰芳簇々先生後生◎、宜哉深同胞好、拳云、山礬是弟

梅兄◎

又

○君寔景仁異性兄弟、岩頭雪峰同參胆心、拳云、人々  
師表乎當世、各々傑出乎叢林、

又

算恒沙微塵數劫、保治世長久、

將軍香

一江西有馬祖、湖南有石頭、參來參去、不分涇渭<sup>拳云</sup>、四姓出家同姓祖氏、四河入海同一鹹味、

拈衣

一針鋒不通處豈借煞麻<sup>◎</sup>、看不伝底衣鉢蕉芭<sup>云々</sup>、有葉無了、

登座

一百尺竿頭進一步進云、早踏斷須弥頭<sup>◎</sup>

回首看左眼窮東南州、右眼空西北州<sup>◎</sup>

祝聖

大日本國山城州平安城北竜寶山大德禪寺新住持伝法

沙門某開堂令辰謹焚寶香端為祝延、

今上皇帝聖躬万歳々々万々歳、陛下

恭惟

記義皇年 天何謂兮地何謂、

戴堯舜日 風以時兮雨以時、

仰願、重華頂万八千丈、比壽山益高、

赤松香

增旌旗光 国家權威長（歸）坂源氏、

重鎗銳命 杜稷安危一在將軍、

破虜曾輕馬伏破者古人預曰、今日武將乎、

伏惟

勅使香

這香插向寶爐、奉為勅使尊官資倍祿位、

共惟

大狀元小狀元、京師榮達、

左丞相右丞相、天然秀才、

將謂塩梅乎帝道、所願黼黻乎法門、

赤松香

這先陀婆、插向一爐、奉為本寺檀越赤松公、倍万祿

位、願振武門猛威、トヨシナヘニ為法社擁護、共惟

開基播陽、拋帝土西南固、

說譜日本、記源家億兆名、

三国旧封蒿目看珊瑚珠樹赤松西、

嗣香

這本來香挿向一炉則三千刹界香、四海香風從是起、  
即今炷以奉為前住當山特賜明堂古鏡禪師一凍老骨（詔過）臚  
供養、以酬法乳恩、

釣語

起

括云、眉間掛劍血濺梵天、若要決法戰勝負、孫吳未下手先、

有廣、

又

○滿眼滿耳乙案現成◎、有春風得意底學者麼出來問着、

鶯到垂楊不惜声、參

提綱

拈丈云、

有物先天地、是雜物者無尽藏、永迷之者、秋天曠野  
泣岐南走北走、古渡頭邊失船東望西望◎、已得之者、  
坐斷報化仏頭、踏着昆盧頂上◎、依之眼空四海、氣吞  
大漾◎、喝下成等正覺、添昆侖作七八片、棒下成等正  
覺、黃金堆消百万兩、或底白雲清山、坐禪坐仏、或  
底紫陌紅塵、提綱提唱、仏々得之、橫說豎說、祖々  
得之、逆行順行、恁廣則并百法界作一張口、東十虛  
真、作廣長舌、向塵々刹々、各現一仏身、說無量無  
邊不可思議法、亦不妨、雖然如此縱道得奇特說得妙  
皆是進香尋跡、嘗古人涕唾黑山下、活計有、什廣所  
長◎、山僧今日為國開堂、何涉多說、祝贊聖明、底一  
句如何說向卓杖云、八表三邊朝紫宸、九州四海絕  
波浪◎、

自叙

某漂泊楚客、惹荳川僧、

十里五里露食風餐、伴拄杖子瘦、

千回万回泥行水宿、任草鞋耳穿、

今日雖成長老、只是前日彭上坐、衆慈高免、

拈提

白槌謝

開堂之次、共惟、龍光東堂大和尚、

天下大老、四海一翁、

和氣留春、無似他三玄杏、

大悲如海、有憶彼小白華、

辱鳴金剛惠植、証吾鄭聲為雅樂、坐斷天下人舌頭、下  
座必走方々室、致方々謝、伏望高照、

次惟諸位東堂大和尚、諸位西堂大和尚、

古云、東有馬鳴、南有提婆、西有竇猛、北有童受、号

為四日照世、抑法筵龍象衆見諸位東堂馬鳴乎東、見諸

位西堂龍猛乎西、南來北來、髡髡乎提婆、依倚乎童受、

于今于古、易地皆然、若罄褒讚之語、恐以小見、瀆廣

德、各昭亮、

捲謝

又惟、山門兩序一會海衆、諸位禪師進一、雖可致謝語、

補

遺

今日開堂事、繁期小參之次、一衆恕宥、

記得息耕、祖師上堂僧同、二月已過三月已來、桃花李

花零亂、桑条柳条成陰、不涉方緣如何、顧鑒、師云、

不覺日、又夜爭教人少年、此僧問、頭面結金色交、師

答處心使是非錐、寶山今日拈提、別打生涯卓一下云、

行到水窮處、坐見雲起時、

○沢庵が京都大徳寺住持の公帖を受けたのは慶長

十四年（一六〇九）二月五日のことであった。な

お、\*印を付した二通の文書は所在が確認できな

かったので、先年採訪時の写真版によつて収録し  
た。

## 補二 親鸞聖人御影并裏書

天文八年八月廿六日

福成寺藏

（上部蓋）

○四行に書く

（如）  
□來本願力（遇）  
□無空過者（能令）  
□□速滿足（功）  
□德大宝海

和朝親鸞聖人

親証如（花押）

（同裏書）

天文八年己亥八月廿六日

大谷本願寺親鸞聖人御影

補二 檟並成安書狀（折

(天正七年)十月三日

惣持寺文書

就御寺領分之儀、御衆中被仰分之通、致披露候之処、當知行分事、不可有御相違之旨、以御書、被仰遣候、此旨為拙者相心得可申達之由候、恐々敬白、

而此時末代為支証候、以連判之一味同心ニ定置候、任置文御判之旨、代僧懸寺僧不可叶候、若御退屈之方々者、供僧職を寺家へ可被返置、聊於已後他所ニ契約候者、兩方共可為御損候、十六口供僧衆者、當寺ニ悉坊舍立可有当住、若此連署御判置文之法を違背輩者、為公方御成敗、寺家可被追放候、仍為後証、別而連判之狀、如件、

補三 惣持寺供僧連署置文

明治七年十一月廿一日

惣持寺文書

（天正七年）十月三日 楊並山城（花押）

行  
事  
玉  
床  
下

詩序文書

持寺文書

連署

右雖守當寺置文御判之旨、近年供僧職を他所工有契約  
以代僧を勤行等勤仕俗家ニ被拘、内々所務候事、於寺  
家、非本意候、今之分候者、已後者可為俗領候間、重

法花院（花押） 奧坊（花押）  
 鎮宥坊（花押） 慶盛（花押）  
 十如坊（花押） 西林坊  
 光清（花押） 旭舜（花押）  
 東泉坊（花押）  
 慶清（花押）

明応七年十一月廿一日

〔卷目裏書〕  
 今披見訖、任法度之旨、不可有相違者也、

明応七年十一月晦日 続久（花押）

〔垣屋〕

補四 物持寺供僧本堂山定書 大永二年十二月朔日

物持寺文書

様ニ為衆中定申候、又山者、何も各之口より一二定置候、又本御堂之谷者、座方実善・行順・行現両三人仁預ケ置候、地子錢武百五拾文ニ毎年可為沙汰候、松之木之過怠同前定候、

若於無沙汰者、為寺家取上可申候、仍為後証、連署如件、

東光院光祐（花押）

二ノ谷ノ東原一

千光院慶祐（花押）

暮谷ノ東原ノ一

安樂坊清祐

同谷ノ東原ノ三

中坊旭祐（花押）

一ノ谷ノ西原

十如坊盛舜（花押）

暮谷ノ西原ノ三

本堂山十六口供僧〔衆〕預リ申候連署之事

右此山者、十六口供僧仁一分宛預ケ申候、然者、毎年地子錢五拾文宛年行事へ御沙汰候て可為御拘候、於若無沙汰者、為衆中、取上可申候、但無当住方ハ預ケ申間敷候、各々為私他所ヘ御壳有間敷候、又松之木一本も御切候方者、過怠百文ツ、ニ定申候、此儀無御承引候ハ、御拘分惣より可給候末代無相違

定

中坊旭祐（花押）  
 十如坊盛舜（花押）  
 法花院快宥（花押）  
 東之坊重祐（花押）  
 安養坊恵秀（花押）  
 藥師院融運（花押）  
 上乘坊舜重（花押）  
 同谷ノ西原ノ一  
 同谷東原ノ二  
 一ノ谷ノ東原二  
 二ノ谷ノ東原ノ二  
 暮谷ノ西原ノ一  
 暮谷ノ西原ノ二

遣  
補

西林坊光盛（花押） 一ノ谷ノ東原ノ三

宝乘坊清秀 二ノ谷ノ西原

弥勒院舜清（花押） 一ノ谷ノ東原ノ一

右此旨、為衆中定所、連署如件、

大永式季午十二月朔日

中坊年行事旭祐（花押）

中将公小年行事光盛（花押）

○この文書、継目裏に東光院光祐の花押あり。

補五 惣持寺諸職寺法置文 天文六年十一月廿五日

惣持寺文書

〔端裏書〕  
「連署」

但馬國一宮惣持寺諸職寺法事  
(殿)以下同

一於本堂、毎月朔日・十七日・十八日・正月晦日大般若、十二月朔日大般若経何モ於勤行懈怠者、過錢五文。宛、年行事可有御出候。

一涅槃講勤行懈怠御方者、過錢卅文可有御出候、

上乗坊（花押）

安養坊（花押）

一七月十五日施餓鬼、九月五日引声、十二月十二日仏名經勤行、何モ懈怠旁候者(方々)以下同過錢五文宛、

一於一宮、百膳三月三日・五月五日・九月九日出仕候、懈怠旁之過錢三十文可有御出候、

一兩行事諸職談合相奉行事、如近年、

一寺家屋敷御拘方ハ坊舍無御造者、何モ地子錢廿疋年

行事へ可有御沙汰候、

一向梅元屋敷一所地子錢百文、一向新開地子五十文、

一釘拔屋敷上坊拘地子五十文、

一同所屋敷太郎左衛門拘地子廿文、

一同所屋敷五郎左衛門拘地子五十文、

一何モ屋敷家造有人者、則可有御上候、

一本下地寺家衆御作有者、一ワリ多可有御納所候、

一非供僧衆事、百姓逐電シ或ハ一国乱無所務候共、其人成風□本尊御存有間敷候、

一和尚者惣持合惣普請御免、

重盛 (花押)	慶永 (花押)
光意 (花押)	弘祐 (花押)
光盛 (花押)	海祐 (花押)
舜祐 (花押)	惠秀 (花押)
重祐 (花押)	光永 (花押)
盛舜 (花押)	旭祐 (花押)
清祐 (花押)	

右、此条々御背旁候者、師弟・同朋・智音不限、致同  
座間敷候、仍後日為、連判之状、如件、

天文六年酉十一月廿五日 年行事南坊 小年行事上坊

光永 (花押) 弘祐 (花押) 清祐 (花押)

右、為悉地為御神樂新所、所奉寄附也、仍寄進之状、  
如件、

觀応三年五月十九日 前駿河守源朝臣 (花押)

補七 年中用抄 上 石清水文書四

(1) 高田莊領家半分田數注文 應永十年六月廿五日

但馬國高田莊領家半分田數事

合

坪とゑの内又くし田	武反	や三郎	大
坪なか田	二反		
坪まつやま			
四郎大夫			
桜本			
○権寺主大法師			
○権寺務公文所			
○権寺主大法師			
○権寺主大法師			
○権寺主大法師			
○少別當大法師			
○都維那法橋上人位			
○都維那法橋上人位			
○兼官ハ公文所持奉			
行也、			

坪くし田又ハなかれかこら(神主)  
参反六十分 かんぬし  
坪こもいけ  
一反  
坪みそゝゑ  
一反  
坪みそゝゑ  
一反  
上殿

同 作人 同 作人 同 作人

觀応三年五月十九日 石清水文書六〇号

菊大路家文書六〇号

石清水文書六〇号

今川頼貞寄進狀

補六 今川頼貞寄進狀

但馬國太田庄内赤鼻村參分壱地頭職事

(出石郡)

奉寄附 石清水八幡宮

但馬國太田庄内赤鼻村參分壱地頭職事

坪なかれ田  
壇反廿五代  
一反

太郎大夫  
惣二郎

壇反別七百文ツ、  
拾貫參拾弐文

以上田数壺町四段小

応永十年六月廿五日

官領也、  
已上一

(2) 宗忠書下案  
寢室町幕府奉行人奉書案

寛正六年八月廿九日

八幡宮領<sup>(出石郡)</sup>菅庄 公用事、自社家、及度々雖被  
申候、尚以、于今難渋之間、被及神訴云々、  
太不可然候、為事實者、早々厳重可被致沙汰

也、仍狀如件、

寛正六年十二月五日

宗忠判

(4) 八所別宮重書注文案

石清水八幡宮領但馬國公用事、先社務之時、致  
引違云々、依難渋度々被仰候處、尚以遲引、太  
不可然、嚴密可致沙汰之旨、可被加下知安本、  
滑良・斎藤帶刀入道等之由也、仍執達如件、  
寛正六月廿九日 <sup>(飯尾)</sup>之種判

八所別宮内伊福・熊次・龜別宮事申入、仍重書正  
文出之、于時社家奉行飯尾肥前入道永祥、<sup>(壇)</sup>壇那寺

三郎左衛門方取続連々正文事、催促ニ照尊モ出也、

院後被付之、

綸旨正文二通 一通ハ延元三年八月一日 中院中將具光  
一通ハ正平六年十二月十二日 左中將 中院頭中將具忠

至徳四閏五月七日 <sup>(斯波)</sup>左衛門佐義將 應永七年三月八日 明徳元  
御教書四通 <sup>(富山基國)</sup>左衛門佐義將 沙弥

徳元、應永十八月九日 德元  
保元宣旨案一卷 保元三十二月三日 勝一申御沙汰也、

保善寺殿御書正文一通 応安二六月二日

又御書正文一通 御国方仁在之、

安本 九貫四百文  
斎藤帶刀入道殿  
代權守

滑良 拾五貫六百文

斎藤帶刀入石拾五貫文

宝徳二七月日在之文安元八月 日十二日歟、  
 御教書三通文安四八十四年十二月卅日(細川勝元) 宝徳二九十四年(畠山持國)  
 遵行宗岸宝徳二九月十四日 打渡同月日 煙続  
 御奉書立番永祥・貞基宝徳元十一月廿三日 打渡同廿四日

煙続

(5) 八所別宮内不知行注文案

八幡宮領但馬国八所別

宮内不知行注文

守護方押領分

津居山(ツヤマ)

桃島(モモシマ)

土田郷布施左衛門尉押領、

安良別(アラベツ)宮内七町ハ社家當知行、  
 安良別(アラベツ)内相残分ハ守護方押領、

小坂郷勘解少路殿御押領、

保善寺殿御押領分今ハ

妙雲寺殿ト申、

熊次別宮七美郡

亀別宮養父郡

○昭和五六年度指定「兵庫県文化財調査報告書」による。執筆は毛利久委員。

補八 薬師如來坐像胎内銘

治承三年六月  
 出石町傍狹区藏

(像高九八・七センチメートル 本造寄木彩色)

神成貞

東方部末正

藤原守遠

口

赤染恒延

物部重延

口

伊福部恒元

伊賀吉次

口

正元

水上正宗

口

多木是

藤原包成

口

東方部助宗

大中臣成次

口

定使品治重宗

同國近

口

神成国

坂合

口

品治秋光

物部安

口

丈部成末

品治光延

口

六人

伊賀貞行

口

紀

長

口

大垣御厨

口

下司散位源家廣

口

惣追捕使散位源孝遠

口

五頭首我重次

神成貞

東方部助延

口

秦助時

赤染恒延

口

道行

重光

口

泰助重

多木是

口

伊福部恒元

水上正宗

口

泰助重

藤原包成

口

伊賀吉次

大宅光

口

伊賀吉次

伊賀貞行

口

伊賀貞行

丹後恒重

口

伊賀貞行

賀茂

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

口

伊賀貞行

賀茂末松

口

伊賀貞行

為交婦

口

伊賀貞行

藤井貞宗

考古編 図・写真・表目次

図 138 位置図	249
図 139 五葉素弁蓮華文軒丸瓦	249
<b>33 宮内出土の古鏡</b>	
図 140 位置図	250
図 141 富寿神宝	250
写真50 富寿神宝	250
<b>34 入佐山経塚</b>	
図 142 位置図	251

写真51 入佐山1号墳と入佐山経塚	251
<b>35 出石神社近傍発見の蔵骨器</b>	
図 143 位置図	252
図 144 蔵骨器	252

## 編集後記

修史のことはながい。

昭和五十二年四月、出石町史の編纂がはじめられてから十年、昭和五十九年三月、第一巻(通史編上)ができてから三年、いま第三巻(資料編I)の発行ができた。ほんとうに嬉しい。

先人の活動をひきつぎ、これを後人に伝える。そのことが現在のわれわれの仕事である。そしてそれが出土文化であり、その表現が歴史資料(遺跡、遺物、遺文等)であって、本町にある資料は、量的に多く、質的に高いものである。その滅失、散逸を防ぎ、蒐集、整理して資料編とすることは、父祖、子孫に対する責務であり、またひろく学術振興に資する所以である。

わが出石町は古代より幕末まで一貫して但馬国の中核であり、「城」と「資料」を兼ね備えている。そのことは兵庫県域でも稀有である。その意味からも出

石町史に資料編が加刊されなければならない。またその価値は一地域的なものにとどまらず、全国的な意義をもつものであり、その公刊は大きな文化的事業である。そのことをわれわれは教えられた。

この視点に立って、昭和五十五年七月十四日、編集委員会は資料編二巻の発刊を企画し、同月二十一日、町長と協議の結果、出石町史は全四巻(通史編二巻、資料編二巻)構成とすることを決定し、編集作業に着手し、前記の如く第一巻は既に発行、ひきつづき第二巻(通史編下)と第三巻(資料編I)を並進、このたび第三巻の発行に到達したのである。

本編に採録する資料の時代的範囲は第一巻記述の範囲に限定し、監修は石田善人氏、執筆は第一巻担当の方々、印刷は河北印刷株式会社に委ねた。

本書を自省して多くの脱漏と誤謬のあることをおそ

れる。批判、<sup>しつせい</sup>叱正を得たい。

末筆で非礼ながら貴重な資料を提供していただいた方々、編集、発行にかかわられた各位に衷心御札を申し上げる。又、大変御苦労をおかけし、完成を待たずには退職された前助役中原久夫氏並びに前総務課長前田正規氏に御札を申し上げると共に、発刊の喜びを分かち合いたい。

最後に本町史編集事業を展望する。道程なかばである。第二巻は現に作業中であり、第四巻についてもその策定をいそがなければならない。諸賢の指導と協力を御願いする。

## 編集関係者

## 出石町史編集委員会

会長	廣井
副会長	長尾家次
委員	石田善人
"	梅谷光信
"	岡本久彦

## 町史編集担当者

小高与志美
吉谷礼子
柴垣
湊崎
康雄
豊

## 発行関係者

## 総務課

助役 (課長兼務)
課長補佐
多根
康雄
下康雄
庶務係長

### 執筆者一覧

監修

石田善人

岡山大学教授

生物編

小幡謹一郎

元神戸高等学校長

考古編

池田正男

兵庫県教育委員会

社会教育文化財課主査

古代・中世編・補遺

石田善人

岡山大学教授

近世編(一~三章・五章)

宿南保

八鹿町立青渓中学校教諭

近世編(六章)

岡本久彦

兵庫県文化財保護指導委員

### 特別執筆者

考古編(Ⅱ章の一部)

前田豊邦

考古編(Ⅲ章の一部)

小寺誠

近世編(四章)

赤在義信

近世編(六章の一部)

竹本敬市

## 出石町史 第三巻 (資料編Ⅰ)

昭和62年11月1日発行

編集出石町史編集委員会

発行出石町

印刷・製本 河北印刷株式会社

京都市南区唐橋門脇町28

